

昭和42年度学校カウンセラー長期研修の概要

カウンセリングは自己研修にまつ実践であり、カウンセラー自身には絶えず実践経験の統合と具現とが望まれているので、カウンセラー養成に関する研修内容が、単に専門的な理論中心あるいは技術中心だけでは不じゅうぶんであり、また、研修参加者ひとりひとりに応ずるためにも、画一的な研修を行なっても意味のないことである。

そこで、当センターでは、カウンセラーとしての資質向上を研修目的とし、研修をともどもに自己研修に励み合う機会であると考え、研修のあり方を学習者中心の立場に求め、これへの過渡的な試案としての年次研修構想をたてて行なっている。

昭和42年度学校カウンセラー長期研修員22名（小学校教員5名 中学校教員12名 高等学校教員5名）であり、これら研修員に1か年間の定期研修を実施した。研修内容を便宜的にわけると、実習・講義・研究論文作成などとなり、このうち特に実習を重要視した。

実習は人間への接近・理解の視点を体得するための実技実演であり、心理測定・カウンセリングなどの10実習を実施した。講義はカウンセリング研究に資するための紹介であり、臨床心理・相談心理などの10講義を行ない、これらの一部は新潟大学医学部、県教育庁指導課などから専門の方々を講師に迎え実施した。研究論文作成は研修員が自己の研究課題を解決するための探索であり、自主的に調査研究し執筆した。

ここに集録してある研究論文22編は、昭和42年度学校カウンセラー長期研修員22名の研究論文である。これら研究論文は、ひとりひとりの研修員自身の努力になるものであり、研修員の個人的研究の方向をうかがい知ることができるとともに、この分野に関心をもつ多くの方々の参考になる。研究論文作成にあたり使用された市販の標準検査は下記のとおりであり、参考までにこれら検査の目的・構成・手続等の概要を記述し紹介する。なお、各検査の（ ）のなかには、著作改訂者名・監修編者名・用紙単価・手引書単価・適用範囲あるいは型式等の順序で記してあり、集団検査であるものは、個別的に実施することも可能である。

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 WISC知能診断検査法（改訂版） | 8 新訂 適応性診断テスト |
| 2 矢田部ギルフォード性格検査（YGT） | 9 EIPC, PAI |
| 3 PFスタディ | 10 教研式 学習適応性検査（AAI） |
| 4 新訂 基本的欲求検査 | 11 S-M社会生活能力検査 |
| 5 集団 新訂人格診断検査 | 12 田研式 親子関係診断テスト |
| 6 幼児・児童性格検査 | 13 田研式 家庭環境診断検査（改訂版） |
| 7 教研式適応性診断検査（DAI） | 14 田研式 道徳性診断テスト |

WISC (ウィスク) 知能診断検査法 (児玉省・品川不二郎 日本文化科学社 用具)
 (改訂版) 6000円(上) 4000円(並) 記録用紙(10人分)
 300円 検査法手引 500円 5～15才

目 的

Wechsler, D. の児童用知能検査法の日本版で、知能を構造的に測定し診断する。また、人格の鑑別診断にも資する。

構 成

言語性検査と動作性検査とで構成され、それぞれ6問題の下位検査からなる。総計170問で、下位検査には、時間制限があるものとならないものを併用している。

手 続

実施法：原則として言語性検査、動作性検査の順序で行なう。各検査の下位検査は5問題を実施すればよいが、4問題あるいは6問題を実施した場合でも評価点修正表により評価点が求められる。(個人検査、検査所要時間約50分)

採点法：各下位検査の粗点を採点基準に従って算出し、次に粗点を換算表により評価点を求める。さらに、言語性検査、動作性検査、全検査の評価点合計を算出し、IQ換算表でそれぞれのIQを求める。

結果の表示法：IQ(全検査、言語性、動作性)、知能構造的な評価点プロフィールで図示する。

矢田部 ギルフォード性格検査(YGT) (矢田部達郎他 竹井機器工業株式会社)
 用紙25円 手引50円
 型式—中学用・高校用・成人用

目 的

Guilford, J. P. の研究に基づいて、個人の多次元性格特性を測定し診断する。

構 成

性格に関する6因子(情緒的安定、社会的適応、活動性、衝動性、内省性、主導性)は、12性格特性(抑うつ性D、回帰性傾向C、劣等感I、神経質N、客観性O、協調性Co、攻撃性Ag、一般活動性G、のんきさR、思考的向性T、支配性A、社会的向性S)の尺度間の相互関連からなる。各尺度は12問、総計120問からなる。なお、小学用も市販されている。

手 続

実施法：各問は3肢選択法からなり、そのうち一つを選び記入回答する。(集団検査 強制速度法で検査所要時間約40分)

採点法：用紙の内側に複写された回答から各尺度の得点を求める。

結果の表示法：各尺度得点をプロフィールで図示し、標準点(5段階点)を求めるとともに、5性格類型(A平均型、B不安定不適応積極型、C安定適応消極型、D安定適応積極型、E不安定不適応消極型)に分類し、典型、準型、混合型の15種の類型に判定し表示する。

P F スタディ (Picture Frustration Study — 絵画欲求不満調査)

(住田勝美他 三京房 用紙30円 手引600円 型式一児童用 (4 ~ 14才) 成人用)

目 的

Rosenzweig, S. の絵画—不満検査法の日本版で、日常経験される欲求不満場面での反応の特徴から人格を診断する。

構 成

人為的、非人為的な障害で自我が阻害されている自我阻害場面16と、他者から非難をうけ超自我 (良心) が阻害されている超自我阻害場面8とからなり、総計24問の欲求不満場面は線画で示されている。

手 続

実施法：原則として各問に記入応答させるが、年少の幼児児童には設問を読みあげて口頭で応答を求める。(集団検査 検査所要時間約30分)

採点法：攻撃の方向 (外罰、内罰、無罰) と反応の型 (障害優位、自己防禦、要求固執) との組合せ類型基準で行ない、場面別採点、プロフィール、超自我因子、反応転移分析、社会適応度を求める。

結果の表示法：各種の採点結果を記録票にまとめ表示する。

新訂 基本的欲求検査 (三好稔 東京心理株式会社 用紙25円 手引70円 小4 ~ 高3)

目 的

児童生徒の基本的欲求を明らかにし、適応状態、異常性格行動、社会性などを診断的にとらえ、指導のための一基礎資料に資する。

構 成

愛情・成就・所属・独立・経済的安定・社会的承認・恐怖および侵害の逃避・罪の逃避・社会的関心の基本的欲求の9種類について、それぞれ家庭・学校・社会の3場面をもうけた問題、総計108問から構成されている。結果は、基本的欲求種別・場面別について、性別・学年別の標準評定段階が求められ、欲求の傾向や強さ、欲求の異常性などが識別される。

手 続

実施法：各問題は9問からなり、そのうち3つを選び○印を記入回答する。(集団検査 検査所要時間30分)

採点法：整理表に、応答を基本的欲求種別・場面別に属する内容に分類し得点を求める。

結果の表示法：得点を性別・学年別の標準得点値などと比較でき、欲求の強さの段階換算法によりその程度を評定し表示する。

集団 新訂人格診断検査(ロールシャッハ法 改訂) (本明寛 金子書房 用紙40円)
手引80円 中1~成人

目 的

ロールシャッハ・テストを集団用にしたもので、原法の解釈仮説に基づいて、全体的な力動的な人格特性、自己統制、知的効率、情緒的作用などを診断する。

構 成

5つの図は、投影法の形式を維持し、型態・色彩・材質を手がかりとして反応できるインク・プロットを用い、各図の反応は、選択肢を選び回答できるように構成されている。

手 続

実施法：各図には8選択肢をもつ2群があり、それぞれの群のうちから、反応の内容や程度に応じて選び記入回答する。(集団検査 検査所要時間約50分)

採点法：整理表に反応の内容や程度に応じて数量化し分類記入する。

結果の表示法：主として簡易診断表を用いる。これは異常傾向・社会的意識・自己統制・知的効率などの14の点で数値を検討し診断する。

幼児・児童性格診断検査

(高木俊一郎 坂本竜生 金子書房)
用紙20円 手引50円 幼稚園児~小6

目 的

子どもの身体的安定を基底とする個人的、社会的な適応力の安定調和を重要視し、両親による子どもの行動評定結果から診断して、精神衛生指導に資する。

構 成

個人的不安定に関しては顕示性(ヒステリー性基調)、神経質(精神反応過敏性)、不安傾向、自制力の欠如、周囲への依存性、退行性、反社会的攻撃性を社会的不安定に関しては友人関係、家庭および学校での対人関係の問題をそれぞれ下位検査項目にし、これに体質(身体反応過敏性)を重みづけて診断するための下位検査項目からなり、10下位検査項目、総計108問で構成されている。

手 続

実施法：各問は2肢選択であり、そのうち一つを選び○印を記入回答する。(集団検査 検査所要時間約40分)

採点法：各下位検査、個人的不安定あるいは社会的不安定に関する各下位検査の得点を求め、パーセンタイルに換算する。

結果の表示法：求めたパーセンタイルを診断プロフィールで図示する。

DAI (Diagnostic Adjustment Inventory)

一 教 研 式 ・ 適 応 性 診 断 検 査)

(長 島 貞 夫 日 本 図 書 文 化 協 会 用 紙 30 円)
(手 引 100 円 型 式 一 中 学 用 , 高 校 用)

目 的

生徒の適応行動を規定する構えとしての適応傾向を測定、診断し、生徒の理解・指導に資する。

構 成

適応傾向のセクションは、環境に関する家庭H・社会Sと、個人に関する身体P・精神Mとであり、これら4セクションについて、第一部では認知傾向(C, 1を付す)を、第2部では反応傾向(R, 2を付す)を、適応傾向のレベルとしてとらえる。セクション別レベル別に15問を配し、総計120問からなる。

手 続

実施法：各問は3肢選択法からなり、そのうち一つを選び記入回答する。

採点法：採点盤により不適応性傾向得点Ad, 問題性得点Prなどを求める。

結果の表示法：性別のAd尺度, Pr尺度に表記しパーセンタイルを求め、適応傾向を図示する。

新 訂 適 応 性 診 断 テ ス ト

(長 島 貞 夫 他 金 子 書 房 用 紙 20 円)
(手 引 40 円 速 算 カ ー ド 15 円 小 5 ~ 中 3)

目 的

児童生徒が現実の環境条件や問題場面でどのように適応しているか、個人的に社会的に健全な人格性を発展させつつあるかどうかを診断する。

構 成

自己適応に関しては、1異常傾向、2神経質傾向、3自尊感情、4退行的傾向、5自己統制の5特性であり、社会適応に関しては、6社会的技術、7統率性、8家庭関係、9学校関係、10近隣関係の5特性である。各特性に15問を配し、総計150問から構成されている。

手 続

実施法：各問は2肢選択法であり、該当するところに○印を記入し回答する。(集団検査 検査所要時間45分)

採点法：特性格得点, 自己適応得点(1~5), 社会適応得点(6~10), 適応性得点(総計)を求め、標準パーセンタイルに換算する。

結果の表示法：各種標準パーセンタイルを適応性診断プロフィールで図示する。

EIPC(The Estimative Inventory for the Problem Child

—問題生徒予測テスト)

(島村輝雄 青山書店 用紙35円 手引無料 型式—中学高校用)

PAI(Personality — Adjustment Inventory

—人格・適応テスト)

(島村輝雄 青山書店 用紙35円 手引無料 型式—中学・高校用)

目 的

生徒の人格・適応に関する問題行動の傾向を早期発見し指導に資する。なお、PAIはEIPCを使用上簡便にするために改訂したものである。

構 成

生徒の人格・ノイローゼ傾向・非行傾向の強さと、これらの原因となる適応感・不安感に関する設問からなる。EIPCは、PAIにくらべて、より詳細に、より鋭敏な結果がえられる。

手 続

実施法；各問は多肢選択を併用する質問法であり、これに記入回答する。(集団検査 検査所要時間約45分)

採点法；採点基準とその手続により行ない整理表に得点を記入する。

結果の表示法；整理表のプロフィールで図示し、問題性や要注意の程度が識別できる。

教研式 学習適応性検査(AAI)

(応用教育研究所・辰野千寿 日本図書文化協会)
用紙40円 手引200円 型式—小5・6年用 中1・2年用 中3年用 高1・2年用 高3年用

目 的

児童生徒の学力向上要因、学習適応性を診断し、学習の能率、効果を高めるための指導に資する。

構 成

学業不振の原因に関する従来の研究成果を基礎にし、学習心理学の立場から、1学習態度、2学習技術、3学習環境、4精神・身体健康に関する4領域とその領域別の3～4の下位検査項目(計14)、さらに各下位検査項目別の10の設問(総計140問)からなる。

手 続

実施法；各問は3肢選択法であり、そのうち一つを選び記入回答させる。(集団検査 検査所要時間約50分)

採点法；各型式共用採点盤により各下位検査の得点を求め、領域別得点および総得点を算出する。

次に、換算表により下位検査得点のパーセンタイルを求めAAI診断プロフィールに、

領域別得点と総得点の偏差値を求めバッテリー用診断プロフィールにそれぞれ記入する。

結果の表示法；AAI診断プロフィール、バッテリー用診断プロフィールで図示する。

S-M 社会生活能力検査

(三木安正 東京心理株式会社)
(用紙25円 手引50円 6~15才)

目 的

Doll, E. A. の社会生活に関する研究などを参考にし、小中学校児童生徒の社会生活能力を評価し、特殊教育や教育相談をはじめ、一般の教育場面での指導に資する。

構 成

社会生活能力の内面的構成領域を、1 身の自立、2 作業能力、3 移動能力、4 意志交換能力、5 集団生活への参加能力、6 自己指南力の6つにわけ、これらの各領域とともに、総合的社会生活能力の評価ができる総計124問で構成されている。

手 続

実施法；被験者の日常生活の状況を熟知している父母・兄弟・担任教師が評価記入する。各問は5肢選択であり、そのうち一つを選び記入回答する。実施にあたって検査の主旨をよく了解させるよう配慮する必要がある。

採点法；採点手続により粗点を求め、換算表により領域別10段階標準点などを算出する。

結果の表示法；標準点プロフィール（領域・総合）で図示し、社会生活能力指数で示す。

田研式 親子関係診断テスト

(品川不二郎・品川孝子 日本文化科学社 用紙30円)
(手引80円 型式一児童生徒用(小4以上)両親用)

目 的

Symonds, P. M. の親子関係に関する研究に基づいて、親の態度を養育者あるいは被養育者の立場から評価させ診断するとともに、子どもの問題徴候をとらえる。

構 成

第1部両親の態度の評価は、拒否（消極的拒否型・積極的拒否型）、支配（厳格型、期待型）、保護（干渉型、不安型）、服従（溺愛型・盲従型）、矛盾不一致（矛盾型・不一致型）の5態度の特徴、8類型にわかれ、各類型に10問、計80問からなる。第2部子どもの問題徴候は、反社会性、非社会性、自己評価・興味・意志の問題、退行性、神経質・神経的習慣・神経症、生活習慣、学力・能力の7項目に関する質問から構成されている。

手 続

実施法；第1部の各問は3肢選択法であり、第2部は該当する問に記入回答する。（集団検査 検査所要時間約50分）

採点法；第1部は類型別に得点を求め、パーセンタイルに換算する。第2部は換算なし。

結果の表示法；類型別パーセンタイルのダイヤ・グラフで図示し評定する。

田研式 家庭環境診断検査(改訂版) (田中教育研究所人格研究部 日本文化科学社)
用紙25円 手引50円 小4～高3

目 的

児童生徒の人格形成に関連する家庭環境の状態を診断し、児童生徒の理解・指導に資する。

構 成

教育的機能としての家庭環境を、家庭の地理的物理的実態に関する静的環境因子、家族関係や家庭と近隣社会との関係に関する動的環境因子にわけて考え、静的環境の要因は、家庭の一般状態(14問)・子どものための施設(13問)・家庭の文化的状態(10問)であり、動的環境の要因は、家庭の一般的雰囲気(10問)・両親の教育的関心(15問)であり、総計62問で構成されている。

手 続

実施法；各問には得点的に重みづけられた3～4の選択肢があり、そのうち1つを選び記入回答する。(集団検査 検査所要時間約40分)

採点法；採点盤を使うと便利であり、各問の回答に対し点数配分表により得点を与える。次に要因別得点合計をパーセンタイルに換算する。

結果の表示法；標準パーセンタイル換算値を家庭環境診断プロフィールで図示する。

田研式 道徳性診断検査

(田中教育研究所 日本文化科学社)
用紙30円 手引50円 小4～高3

目 的

具体的な問題解決場面での児童生徒の道徳的判断を求め、自己・家族・友人・社会の4領域にわけて、道徳性の形成や発達を診断的にとらえる。

構 成

自己に関する問題、家族・親せき・教師などの親しい間柄にある長上・知人に対する問題、友人に対する問題、一般社会に対する問題の各領域10問、計40問で構成されている。

手 続

実施法；各問4肢選択法であり、選択肢のうちで最善のものに○印を、最悪のものに×印を記入回答する。(集団検査 検査所要時間約45分)

採点法；領域別あるいは総合の得点合計を求め領域別パーセンタイルあるいは道徳性偏差値に換算する。

結果の表示法；領域別にはパーセンタイル、総合的には道徳性偏差値で示す。